

だ い ず 通 信 令和6年度 第5号

1 令和6年産の気象と管内の農作業の経過

- (1) は種作業は5月下旬から始まったが、5月末からの降雨により作業に遅れがみられた。湿害の影響はなく、出芽は良好だった。
- (2) は種後から成熟期にかけて気温は概ね平年を上回り、時折まとまった降雨があったものの降水量は平年よりやや少なかった。日照時間は平年より多かった。
- (3) 管内の成熟期は概ね平年並の10月中旬で、収穫作業は10月22日から始まった。十和田市の刈取最盛期は11月8日(平年比6日遅)、七戸町は11月9日(平年比2日遅)となった。

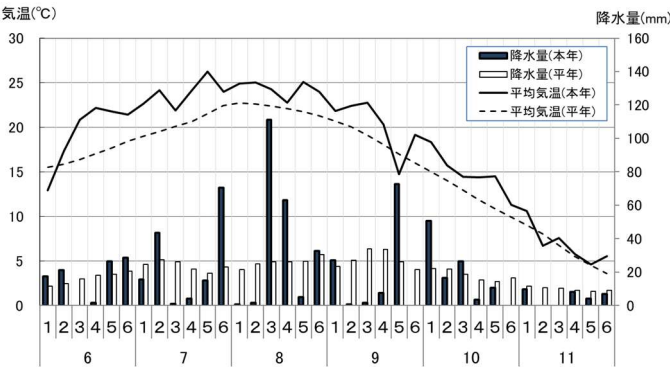


図-1 平均気温と降水量

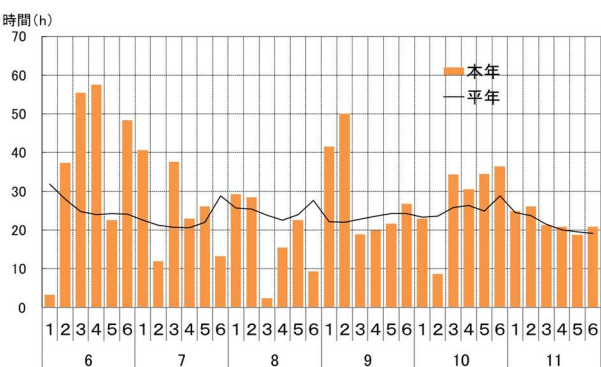


図-2 日照時間

2 令和6年産の県生育観測ほの生育状況

(1) 生育調査結果

は種日は平年より2日遅い6月9日で、は種から開花期にかけて気温が高く、開花期は平年より8日早い7月27日だった。8月10日の生育は、草丈、主茎長ともに平年を上回り、ほ場の一部で倒伏がみられた。

(2) 収量調査結果

成熟期は平年より2日遅い10月14日で、分枝数は平年より少なく、総莢数は平年よりやや多かった。子実重は215kg/10aで平年より少なく(平年比66%)、百粒重は34.5gで平年を下回った(平年比94%)。検査等級は2等だった。

表-1 生育状況調査結果

地点名	年度	生育ステージ			出芽 本数 (本/㎡)	成熟期		子実重 (kg/10a)	百粒重 (g)	被害粒率(%)			
		は種期	開花期	成熟期		分枝数 (本/本)	総莢数 (莢/本)			未熟粒	紫斑	虫害	その他 被害粒
県生観	本年	6月9日	7月27日	10月14日	14.8	4.0	44.0	215	34.5	1.6	1.2	4.4	2.7
	平年	6月7日	8月4日	10月12日	14.1	5.4	42.2	328	36.6	-	1.3	1.2	8.7
	差・比	遅2日	早8日	遅2日	106	74	104	66	94	-	95	369	31
地区生観	本年	6月9日	7月26日	10月15日	19.4	2.0	32.3	361	37.3	1.0	0.4	1.7	3.3
	平年	6月1日	7月29日	10月12日	17.3	2.6	29.1	242	35.0	-	1.2	1.9	4.8
	差・比	遅8日	早3日	遅3日	112	77	111	149	107	-	32	88	69
地区生観 (晩播狭畦)	本年	6月27日	8月5日	10月19日	33.7	3.3	23.8	224	35.1	1.5	4.7	3.2	4.2
	平年	6月25日	8月10日	10月19日	26.9	2.4	21.8	273	32.4	-	0.4	6.1	4.3
	差・比	遅2日	早5日	±0	125	135	109	82	108	-	1143	52	99

平年は、県生観: 令和3~5年、地区生観: 平成22~令和5年、晩播狭畦: 平成28~令和5年

3 令和7年産に向けたほ場準備

(1) ほ場選定

- ・大豆の連作は、収量の減少、雑草の繁茂、病虫害の発生など様々な弊害が発生することから、ブロックローテーション等の輪作を実施し、連作は避ける。

(2) 排水対策

- ・転作田では額ぶち明きょを施工し、排水対策を講じる。
- ・さらに排水性を高めたい場合は溝切りを行い、溝と明きょを確実に接続する。

(3) 土づくり

- ・完熟堆肥等の有機物を施用し、地力向上を図る。特に、大豆が連作となるほ場は地力が低く子実が小粒化しやすいため、必ず土づくりを行う。
- ・土壌診断を行い、pH6.0～6.5 を目標に石灰資材を施用する。
- ・石灰質資材を毎年大量に施用し続けると、土が固くしまりやすくなるため、有機物の施用と組み合わせて行う。

■表-1 化成肥料を無施用あるいは半減する場合の堆肥施用量の目安(10a 当たり)

種 類	施 用 量	堆肥窒素量	化成肥料施用量目安
牛糞堆肥	1,000kg/10a	施肥設計に含めない	1/2 減肥～ 通常通り散布
豚糞堆肥	150～300kg/10a	7.0～10.0kg/10a	無肥料～1/2 減肥
鶏糞堆肥	150～300kg/10a	6.0～8.0kg/10a	無肥料～1/2 減肥
鶏糞燃焼灰	土壌診断により算定		

※堆肥は製造方法により成分にばらつきがあるため、窒素成分により散布量を加減する。

(4) 耕起

- ・除草剤の効果を高めるほか、出芽や苗立ちを向上させるため、碎土・耕起は丁寧に行う。
- ・発芽やその後の生育面からは、径2cm以下の土塊が70%以上とすることが望ましい。

(5) は種前除草

- ・前年に雑草が多かったほ場では、は種前に非選択性除草剤を散布する。

Point ダイズシストセンチュウについて

ダイズシストセンチュウは、大豆の根に寄生し光合成で生産した栄養を奪うため、多発生ほ場では生育の遅延や減収といった被害をもたらします。発生ほ場では、7月～8月上旬頃に坪状あるいは全面に、茎葉が黄化し生育が悪くなります。

一度発生すると除去することが難しいため、センチュウを「増やさない」「広めない」「持ち込まない」対策が必要です。

<センチュウの発生が疑われる場合>

- ① 汚染土壌を他の畑に持ち込まないよう発生ほ場の作業は最後に行う。
- ② 作業後は機械を洗浄し土を洗い流す。特にタイヤや作業機の周りは丁寧に行う。
- ③ 大豆の連作は2～3年以内とする。